

爆・発

新地 正洋

登場人物

遠藤秀司（えんどうしゅうじ） 15才 中学3年生 高校受験の年

佐藤敬三（さとうけいぞう） 82才 10歳のとき長崎で被爆 右半身はケロイド状 秀司の祖父

三間太一（みつまたいち） 15才 いじめっ子 親は地元の会社社長

山田聡（やまださとし） 15才 いじめっ子

中村信三（なかむらしんぞう） 15才 いじめっ子

遠藤美紗緒（えんどうみさお） 50才 秀司の母親 敬三の娘

担任教師 科目 数学 理科担当

教師1 科目 国語担当

三間陽一（みつまよういち） 45才 市長

○明け方の住宅街の俯瞰

緑の木々のある公園。そこで鳴く蝉の声。

公園には背の高い管理人のような人が紫外線対策のように全身を長袖長ズボン、軍手。

少し右足を引きずりながら掃除をしている。

顔もほぼ隠れているがたまに見える左の顔はしわか深くおじいさんだと分かる。しゃがみこんで辛そうにしているがしばらくすると立ち上がり作業を始める。

○秀司の家

秀司の家の概観。平屋の一軒家。

表札は佐藤と遠藤の二つ。

○秀司の部屋

カーテンを閉めた暗い部屋の中に漏れる光。

机でパソコンに打ち込みをしている秀司。

パソコンの画面の光に浮かぶ秀司の顔。

打ち込む音がモールス信号の SOS のように聞こえる。

画面の文字は「死にたい」で埋め尽くされている。

廊下を少し引きずるような足音で秀司の手が止まり、パソコンを閉じる。

ドアをロックする音。

敬三「秀司、朝ごはんだ」

秀司「・・・うん」

しばらくすると遠ざかる足音。

ため息をつく秀司。パソコンを開く。一文字ずつディレイトしていきが途中からは長押しで消していく。

パソコン画面が画額一杯になりホワイトアウトする。

○タイトル

「爆・発」

○学校

青空に蝉の鳴き声。

ゆっくりスライドして校舎の俯瞰。

チャイムの音。

○教室

「3-2」のプレート

女子「起立、礼」

教室内。俯瞰。

生徒「お早うございます」(思春期の男女なのでごによごによした感じ)

担任「おはよう！」

女子「着席」

担任「ホームルーム始めます。青山。秋田。遠藤・・・・・・・・」(生徒は手をあげるだけ。

担任はそれを見てチェック)

秀司は一番後ろの窓際の席にいるがなんとなく他の生徒から離れた位置に席がある。名前を呼ばれて中途半端に手を上げる。

秀司は人の目を避けるように窓の外を見る。

秀司の後頭部に髪を丸めたボールが当たる。三間、山田、中村が笑って秀司を見ている。

秀司、顔を机に落としているが机の上にある秀司の手は握られ震えている。

秀司の頭にまた紙のボールが当たるが無視をする。

○一時限目前

秀司のところに三間たちが紙のボールをぶつけながら近づく。

秀司は知らない振りをしているがこぶしは握られたまま。

三間「友達が紫外線しかいない遠藤君。もうちょっと席はなしてくれないかなあ」

と机を前から足で押して下がらせる。秀司は机とイスにはさまれるようになっている。

山田「俺たちが被爆するだろう？」

中村「つーかいつ帰るんだよ。6年も放射能撒き散らしてんじゃねーよ」

山田「もう避難解除してんだろ？」

三間「そうだっけ？じゃあ帰らなきゃな」

山田「帰れ、帰れ、帰れ……」

三間と中村も徐々に入っていく。周りの生徒は見ぬ振りしているもの、無視しているもの、笑って見ているもの、一緒にはやし立てるものなど反応はバラバラだが助けようとするものはいない。

一時限目のチャイムが鳴る。そこへ担任が入ってくる。

担任「チャイムが鳴ってるのが聞こえんのか？ちゃっちゃと席に着け」

生徒たちは席についていく。

秀司机から教材を出す教材とともに大量の蟬の抜け殻が出てくる。

秀司「わああああ!!」

とよけてイスから転げ落ちる秀司。

担任「どうした遠藤！」

担任が遠藤に近づき絶句するがその場を取り繕うように

担任「イヤー懐かしいなー。小学生のときよく集めていたな。遠藤あとで先生にもくれないか？」

遠藤「……保健室」

担任「ん？」

遠藤「行っていいですか保健室」

担任「あ？ああ」

三間「俺連れて行きます」

秀司が三間を見るとニヤニヤして見ている。

担任「そうか？遠藤、連れて行ってもらえ」

秀司、担任をにらみつめる。が担任はさっさと教壇に戻る。

○保健室

秀司と三間が保健室に入ってくる。

部屋には誰もいない。

三間が秀司をベッドに連れて行き押し倒す。

とそこに山田と中村が入ってくる。

それにビビる三間。

三間「オドかすなよ」

中村「すまん」

と言いながら鍵を閉める。

三間「またトイレか？」

山田・中村「ピンポン！」

三人笑いながら

三間「気分が悪いんだろう？さっさと寝ろよ」

と秀司に布団を掛けてその上から黙って暴行を始める。

布団の中から時折うめき声があるが三人は構わず暴行をし続ける。
やがて三人は暴行をやめ汗を好きながらドアに向かい始める。

ドアから出るとき

三間「遠藤、第二形態になったら教室に戻るんだぞ」

　　そういい残して保健室を出て行く三間たち。

中村「三間言いすぎ。遠藤がゴジラになれるか？」

三間・山田「そりゃそうだ！」

　　廊下に三間たちの笑い声が響き遠ざかっていく。

　　残された秀司は布団の中ですすり泣き始める。

　　大きくなりそうな声を押し殺して泣き続ける。

○秀司の家　夕方

　　玄関前。

　　ずぶ濡れの秀司。

○回想

　　秀司が小川に沿った砂利道を歩いていると三間が追いかけてきて

三間「燃料棒は冷やさないとな！」

　　と言って秀司を小川に突き落とし

三間「メルtdownしないようによく冷やせよ」

　　秀司を残して三間たちは去っていく。

○玄関前

　　玄関をそろそろと開けると奥から包丁で何かを切っている音がある。

　　秀司は静かに中に入る。

　　と家の奥から声がかかる。

敬三「秀司か？」

　　びっくりする秀司

秀司「・・・ただいま」

敬三「風呂を沸かしてくれ、夕飯の支度で手が離せないんだ」

　　秀司、敬三に見つからないように台所の前の廊下を抜けて風呂場に向かいながら

秀司「母さんは？」

敬三「夜勤だ」

秀司「そう」

　　秀司風呂場に入る。しばらくすると風呂を洗うためかシャワーの音がある。

　　敬三の後姿。ふと思い出したように包丁を置く。

　　振り向くと右の顔と頭がケロイド状になっている敬三。

　　足を引きずりながら廊下に出て

敬三「秀司、水を張るだけ・・・」

　　足元が濡れていることに気づき足をのける。

　　足裏についた水をズボンのすそで拭いながら廊下を見ると水浸しになっている。

敬三「・・・」

　　台所に戻り夕飯の支度を再開しようとする敬三。しかし座り込みじっと我慢している。

○進路指導室

　　担任と秀司が向かい合って座っている。

　　秀司は下を向いている。

　　担任は持っていた資料を机に置く。

担任「今の成績じゃなあ。ワンランク下げないか？」

秀司「はあ」

担任「ま、もうちょっと考えて見ろ」

秀司「はあ」

秀司を見つめる担任。深いため息をつく。

○同日 学校屋上

青空に蝉の声が響き渡っている。

秀司が屋上のフェンス越しにいる。やがてフェンスに手を掛けてフェンスを越えていく。

すぐ屋上の端になっていてその先は下まで落ちてしまう高さになっている。

その端のくぼみに紙が引っかかっている。

それを拾い、フェンスに戻ろうとするとそこに三間たちがニヤニヤしながら立っている。

三間「手伝ってやろうか？」

秀司「な…何を？」

三間「自殺に決まってるだろう？したいんだろう、自殺？」

秀司「は？」

中村「どうせするならあっちのほうがみんなに見られて派手じゃね？」

山田「あっちでしょうぜ」

秀司「やめろよ！」

と三人は秀司をフェンス越しからいったん中に引きずり入れて反対側の正門が見えるフェンスまで引きずっていく。

秀司「やめてくれ！」

三人は秀司をフェンスの外に出そうと持ち上げ始める。

抵抗する秀司。

きしむフェンス。そのフェンスの上に乗せられた秀司。とフェンスが倒れ秀司はそのまま落下する秀司。

途中木の枝に引っかかりながら下まで落ちる。

ドスンと大きな音が響く。

一瞬蝉の巻き声が止まる

校舎内から悲鳴が鳴り響く。

騒然とする。

三人は呆然と下を見ていたがわれに返り屋上から逃げ出す。

やがて急激に黒い雲が出てきて雷鳴が響き渡る。

遠くから救急車のサイレンが近づいて来、ゲリラ豪雨が降り始める。

○同日 学校

沢山の警察車両がランプをつけて止まっている。

その間を縫うように報道陣の車両やクルーがひしめき合っている。

屋上や秀司が落ちた場所が検証されている。

他の教室では生徒や先生が警察から事情聴取を受けている。

三間たちもその中にいて事情聴取を受けていた。

三間「僕が屋上に来たら丁度フェンスを越えようとしてフェンスが倒れていったんです。

自殺かどうか分かりませんね」

中村「あれびっくりだよな？」

山田「まさかフェンスが曲がるなんて」

山田二人ににらまれるが意に介していない。

○病院

集中治療室。

何人かの患者が寝ている。
そこから看護師が出てくる。
それから救命室に向かう。
そこには秀司が左足と左腕にギプスをつけて寝ている。
顔には擦り傷があっちこっちについている。
看護師は秀司を小突きながら

美紗緒「よく助かったもんよ。母さん心臓が縮みました」

秀司「ごめん」

そこに肌を出さないように着込んでいる敬三がジュースを持ってくる。

敬三「ほれ、これでいいか」

秀司「ありがとう」

美紗緒「お父さん、私まだ仕事あるからあとお願い」

敬三「今日は帰れないのか、こういう時こそ傍についてやらないと」

秀司「おじいちゃん」

美紗緒「ごめんね」

秀司「いいよ。おじいちゃんいるから。行って」

美紗緒「ごめんね」

美紗緒ばたばたと立ち去る。

敬三「退院もできるが入院するか？」

秀司「いいよ。お母さんの迷惑にもなるから。それに病院は……」

敬三「……そうだな。帰るか」

○タクシー

秀司と敬三。二人は黙ってタクシーの後部座席に座っている。

と突然敬三が運転手に

敬三「ここで降ります」

タクシーを降りる二人。

敬三は今来た道に戻り始める。

秀司「どこ行くの？」

敬三「……」(秀司を手招きする)

秀司、片方だけの松葉杖で敬三のあとをついていく。

するとおでんの屋台に行き着く。敬三がそこに入っていき座る。秀司もその隣に座る。

店主「なににします？」

敬三「冷とコーラでいいか？コーラを。あと適当にみつくろって」

店主「あいよ」

敬三はおもむろに帽子を取り上着を脱ぎはじめケロイド状の肌を露出し始めた。

それに驚く秀司。

少しすると冷酒とコーラが出てきておでんも出てくる。敬三は何も言わないで秀司と乾杯だけして冷酒をちびちび飲んでいる。秀司は何かを決意したようにおでんを食べ始める。

屋台の俯瞰。

○秀司の家

玄関先

秀司「行ってきます」

敬三「(声だけ) いってらっしゃい」

秀司玄関を出る。敬三、台所から出てきて秀司が出かけたことを確認する。敬三は秀司の部屋に行きパソコンを開く。ネットにつなぎ市のホームページにアクセスする。

市長選の立候補資料を漁りプリントアウトしていく。

○同所 3 時間後

敬三はスーツに身を固めている。

美紗緒「ただいま」

敬三、そのまま玄関に向かう。その姿に驚く美紗緒。

美紗緒「どうしたの？お見合い？」

敬三「出かけてくる」

美紗緒、あつけにとらわれる。

○学校

秀司が投稿したことに驚いている三間たち。不安で秀司に近づこうとしない

○同日 市役所

敬三が入ってくると皆避けるように道ができる。そのまま窓口にいる係の人間に向かい

敬三「今度の市長選に立候補したいんだがどこに行けばいいかな？」

○学校 3 日後

秀司が朝居言う室に入ってきたところを待ち構えていたかのように三間が食ってかかってくる。

三間「どういうことだよ」

秀司「？？何が？」

三間「とぼける気か？」

秀司「だから何をだよ」

三間「何でお前の爺さんが市長選に立候補してんだよ!!」

秀司「は？」

三間「何しらばっくれてんだよ！」

秀司「知らないよ」

三間、顔を真っ赤にして秀司を殴る。

秀司転ぶ。三間、転んだ秀司に馬乗りになって殴りつける。止めに入る山田と中村。

三間「親父は市長でなきゃいけないんだ。もう違うんだから……」

秀司を放して教室から出て行く三間。そのあとを追う山田と中村。

秀司は三人を見送るが何事もなかったように自分の席に着く。

凍り付いていた周りもほっとしたように日常に戻っていく。

秀司、少し落ち着いてくるとさっきの三間の言葉が頭で繰り返される。

三間「親父は市長じゃなきゃいけないんだ！もう違うんだから……」

秀司「……」

○秀司の家 夕方

玄関前

沢山の人の笑い声が聞こえてくる。

秀司「ただいま」

玄関には沢山の靴と黒いごつい箱やら傘みたいなもの照明のようなものがある。

廊下に立つと居間からおびたらしい光が漏れている。

近づくともカメラや照明がありテレビで見たことのある女性がマイクを片手にスーツ姿の敬三にインタビューをしている。

アナウンサー「被爆されたのは長崎ですか？」

敬三「1945年8月9日、当時9歳だった私は爆心地から2kmのところにおりました。警報

が鳴ったんですけどね、当時は誤報が多かったから信じないでリアカーを引いてて熱いから日陰に入ろうとしたときこっちだけ（右を指し）出てて、気づいたら倒れてました。右は猛烈に熱いし回りは焼け爛れたものが沢山あってうごめくものがみんな黒くてね。怖くなって逃げました。何でかわかんないけどとにかくここは危ない。そう思って高いところへ逃げました。

後で知ったんですけどね。低いところには街中の川の中には水を求めて煮えたぎった川に人々が飛び込んで死んでいったらしいです。

私は運がよかった。どこをどう通ったか分からないし今でもそこがどこか分からない。病院に担ぎ込まれて治療を受けることができた。

何度も死に掛けましたがね。よくこの年まで生きてこれた。

でもねよくいじめられました。戦争が終わってからもう何年たってもいじめられました。放射能が移る。化け物。気持ち悪い。近づくな。うちの子と遊ばないで。近所迷惑っていわれたこともありました。悲しかったですね。それからですね。人目につかないような暮らしをしていたのは」

アナウンサー「ご苦労されたんですね。お子様は現在看護師ということですが」

敬三「私を見て育ったせいですかね。」

アナウンサー「旦那さんは福島原発事故の作業員だったそうですが。」

敬三「はい。必死に爆発を止めようと実を呈したんですがそのせいで被爆しましてね。」

しんとした空気。その空気を破るように

敬三「あの」

アナウンサー「はい。何でしょう？」

敬三「今ここには孫と娘と 3 人で暮らしているのですが、やはり多分にもれず孫がいじめにあっているようでしてね。だから私今回の市長選に立候補したんです。

私の外見で嫌がる人もいるでしょう。でも分かりやすいでしょう。これが被爆なんですよ。孫は自身の被災者であって被爆はしていないんです。それに被爆は風邪のようにうつりません。それも知ってもらいたくってね」

秀司呆然と見ていたが自室に行く。

○同所 2 時間後

インタビューも終えて取材班も引き上げたあとの居間。敬三一人ソファに座っている。

秀司が居間に入ってくる。

敬三「帰っていたのか」

秀司「うん」

敬三「インタビュー見てたろ」

秀司「うん」

敬三「そうか。勝手にお父さんの話もしてしまった」

秀司「いいよ、別に」

敬三「そうか」

秀司「・・・出るの？市長選」

敬三「ああ」

秀司「どうして」

敬三「お前がいじめられているのは分かりやすいからな。知ってた。市長選に立候補したのはそれもある。だが一番は隠れてこそそそしていた自分が恥ずかしくてな。これを機会に カミングアウトしてしまえって思って、立候補、した。」

秀司「そう」

敬三「いやか？」

秀司「いやって言うより、なんでかなって・・・」

敬三「・・・」

秀司「今の市長の息子同じクラスなんだ。今日そのことで・・・ちょっと気になること
言われて・・・」
敬三「なんて」
秀司「親父は市長じゃなきゃだめなんだ。もう違うんだから。何がもう違うのかわかん
なくて」
敬三「あああ」
秀司「なに？」
敬三「あいつの親くらいなら誰でも知ってることさ。昔ぐれて悪がきの上にそのうちやく
ぎになってな。」
秀司「やくぎ?!」
敬三「それが太一が生まれて改心したのさ」
秀司「で市長？」
敬三「あれはあれで苦労人さ」
秀司「敵なのにな？」
敬三「敵ってのはちょっと違うかな。同士かな？それも違うか・・・」
秀司「何だよそれ」
敬三「そうだな」
秀司「向こうは根強い人気だよ・落選したら？」
敬三「元の生活に戻るだけさ」
秀司「そうだね」
敬三「そうさ。さ、夕飯作らないと」
秀司「えー？今から?!」
敬三「・・・出前取るか」
秀司「ピザ！」
敬三「電話しろ！」
秀司「やったー！」
秀司、携帯で電話する。敬三脂汗をぬくいながら必死にニコニコしている。

○学校 4ヵ月後 進路指導室

担任「遠藤、これなら志望校行けるぞ」
秀司「ありがとうございます」
担任「ただ滑り止めも受けとけよ」
秀司「いえ、ここ一本で行きます」
担任「でもな・・・」
秀司「大丈夫です」
担任「そうか、わかった」

○同所 教室

プレート「3-2」
三間「どうだった？」
秀司「大丈夫」
中村「マジか！」
山田「すげえ！」
三間「秀司すげえな、お前」
秀司「ありがとう」
三間「今日これからクリスマス会の買い物行くんだけど、どう？」
秀司「ごめん、今日母さんと行くところがあるんだ」
三間「あ、じゃあ、クリスマス会でな」

秀司「うん」

○墓地

喪服の美紗緒と制服の秀司が墓の前に立つ。

墓標には「佐藤家之墓」とある。

二人で丁寧に掃除をして花を替え線香とお酒を供える。

秀司「(手を合わせながら) じいちゃん志望校いけそうだよ。見守っててね」

美紗緒「お父さん病気のこと黙って逝っちゃうなんて・・・娘としてなんかね・・・」

秀司「選挙のことも結局、立候補してすぐ死んじゃったから・・・あれ絶対テレビでたかっただけじゃない？」

美紗緒「言えてる！」

秀司「ま、おかげでいじめもなくなりました。ありがとう、おじいちゃん」

美紗緒「秀司のところはね。場所によっては客に増えたらしいわ。お父さん、向こうでお母さんと仲良くしてね。・・・さ、行こうか。夕飯何が食べたい？」

秀司「ピザ？」

美紗緒「またあ？いいけど」

二人は墓を背に遠退いていく。

活けられた仏花が急に元気に咲き誇る。